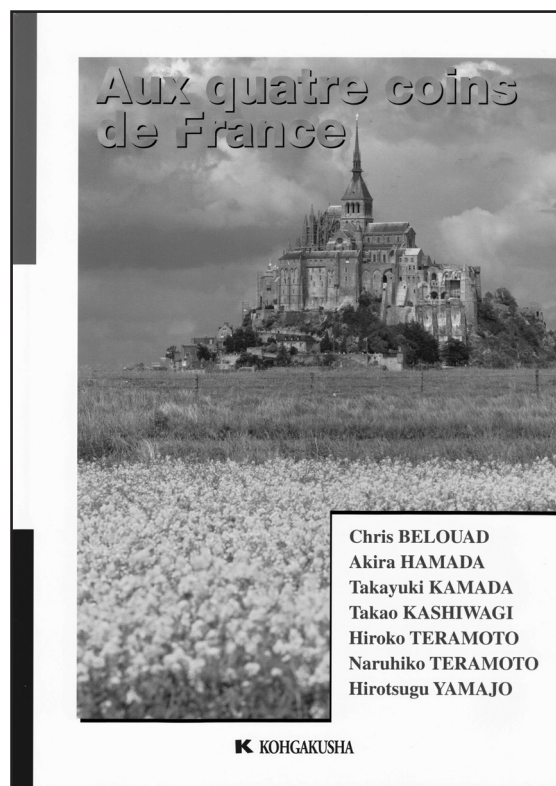


Aux quatre coins de France

フランスところ、どころ

一人名・事項注一



目次 (table des matières)

1. Paris	3
2. Paris et la littérature	4
3. Versailles	6
4. Reims et la Champagne	7
5. La Bretagne et la Normandie	8
6. Rouen, Honfleur, Étretat et le Mont-Saint-Michel	9
7. Bordeaux, la capitale mondiale du vin	11
8. L'Aquitaine et la littérature	11
9. La Touraine : le « Jardin de la France »	12
10. Balzac et la Touraine	13
11. Le Midi-Pyrénées et le Languedoc-Roussillon	14
12. Lourdes, Toulouse, Albi et Carcassonne	14
13. La Provence et la Côte d'Azur	15
14. La Provence et les artistes	15
15. L'Alsace, la Lorraine et la Bourgogne	16
16. Strasbourg, Colmar, Nancy et Dijon	16
17. Lyon	17
18. Genève	17
19. Les Alpes : le Dauphiné et la Savoie	18
20. Aix-les-Bains et Grenoble	18

* 21. Au-delà du continent : la Corse et l'Outre-mer は【 Supplément 】 のため「人名・事項注」は製作いたしておりません。

1. Paris

île de la Cité : シテ島。セーヌ川の中州で、パリの中心部。後述のノートル＝ダム大聖堂のほか、サント＝シャペルやコンシエルジュリーなど多くの歴史的建築物が残されている。

l'église Saint-Germain-des-Prés : サン＝ジェルマン＝デ＝プレ教会。ロマネスク様式独特の重厚な石造りで窓が小さく、建物の内部にはほの暗い荘厳さが醸し出されている。

la cathédrale Notre-Dame : ノートル＝ダム大聖堂。ゴシック様式を代表する壮麗な建築で、塔の垂直性が強調され、天空に至るかのようなダイナミズムを持つ。中世のパリにおける人々の心のよりどころであった。また、パリから各地への距離を表す起点となっている。地下には3世紀につくられたシテ島の城壁の一部が保存されている。

la Sorbonne : ソルボンヌ大学。13世紀に創設され、ヨーロッパで最も古い大学の一つ。神学者ロベール・ド・ソルボンが設立した学寮をもとにつくられたのでこの名で呼ばれるようになった。

la guerre de Cent Ans : (英仏) 百年戦争 (1337-1453)。カペー朝断絶後のフランス王位継承問題やワインの重要な生産地であるボルドーを擁するアキテーヌ地方(→第7課参照)の領有権などの争点が絡み合い、両国の間で戦いが泥沼化した。

Jeanne d'Arc : ジャンヌ・ダルク (1412-1431)。百年戦争の際、救国の神託を受けたとされ、フランス軍を鼓舞した伝説の国民的英雄。文学作品や映画でも多く取り上げられている。

le massacre de la Saint-Barthélemy : サン＝バルテルミの虐殺。宗教戦争の只中の1572年8月24日(サン＝バルテルミの祭日)に始まる、カトリック教徒による新教徒の虐殺。パリだけでなく、地方へも波及した。

l'Ancien Régime : 旧体制。フランス大革命以前の絶対王政の政治体制を指す。

journaux à grande diffusion : 1836年に創刊された『ラ・プレス』紙は広告の導入によって競合他紙の半額という安価な購読料を実現。著名な作家による連載小説などを掲載して紙面を充実させ、人気を博した。その後、多くの新聞が同種の試みを行うようになり、新聞の読者が飛躍的に増加した。

grands magasins : 十九世紀半ばからパリにデパートが次々と誕生し、それまでの「流行品店」に代わって消費社会を席卷した。エミール・ゾラ『ボヌール＝デ＝ダム百貨店』(→第2課の事項注参照)はそうした黎明期のデパートを舞台としている。

Toson Shimazaki, Mitsuharu Kaneko, Taro Okamoto : 島崎藤村 (1872-1943) は日本の自然主義文学を代表する作家。金子光晴 (1895-1975) は象徴主義詩人・翻訳家。岡本太郎 (1911-96) は前衛芸術家で、晩年には多くのテレビ番組やCMにも出演した。

2. Paris et la littérature

marchés aux puces : 特にパリの北端のクリニャンクールクリニャンクールの蚤の市が有名。家具、衣類、革製品、アクセサリ、土産物、CD、DVD など、骨董品からガラクタまで多様な品物が売られている。

Notre-Dame de Paris : 『ノートル＝ダム・ド・パリ』(1831)。ユゴーの小説。映画、ミュージカル、アニメ化でも知られる。15世紀のパリ、ノートル＝ダム大聖堂と周辺を舞台に、流浪の踊り子エスメラルダ、聖職者でありながら彼女に恋慕し、あまつさえ誘拐しようとする副司教フロロ、彼女を救おうとする鐘つき男カジモドラの数奇な運命が物語られる。厳然と聳え立つ大聖堂が象徴するキリスト教を中心とした伝統的な知が、印刷物による新たな知の流布によって覆される可能性を象徴的に示した「これがあれを滅ぼすだろう」の一節が特によく知られている。

Victor Hugo : ヴィクトル・ユゴー (1802-85)。フランスを代表する詩人、劇作家、小説家にして人道主義者。王党派のロマン主義青年詩人として出発するも、後年、ナポレオン三世のクーデターに反対して第二帝政下に亡命するなど波乱に富んだ生涯を送る。詩集『オードとバラッド』(1822-28)、『東方詩集』(1829)、『懲罰詩集』(1853)、『静観詩集』(1856)、『諸世紀の伝説』(1859-83)、劇作品『エルナニ』(1830)、『リュイ・ブラス』(1838)、小説『ノートル＝ダム・ド・パリ』(前述)、『レ・ミゼラブル』(1862)、『93年』(1874) など多数。なお、本文中のラ・ユシエット通りは『ノートル＝ダム・ド・パリ』にも登場する。

Louis-Sébastien Mercier : ルイ＝セバスティアン・メルシエ (1740-1814)。作家・ジャーナリスト。十八世紀のパリの社会風俗を克明に描き出した『タブロー・ド・パリ』(『パリ生活誌』) で知られる。

Le Ventre de Paris : 『パリの胃袋』(1873)。ゾラの小説。ルイ・ナポレオン (後のナポレオン三世) のクーデターの際に無実の罪で捕えられ、その後流刑地から脱走してきた夢想家フロランを主人公とし、食や性愛の快楽に無縁なこの男との対比で、ありとあらゆる欲望のエネルギーが渦巻くパリ中央市場を活写。第二帝政期の肥大化する首都を象徴する食の殿堂が余すところなく描かれている。原題の直訳は『パリの腹』であるが、邦題は『パリの胃袋』が定着している。

Émile Zola : エミール・ゾラ (1840-1902)。作家・批評家。『パリの胃袋』(前述)、『居酒屋』(1877)、『ボヌール＝デ＝ダム百貨店』(1883) など全20巻からなる『ルーゴン＝マッカール叢書』はフランスの自然主義文学を代表する小説集。また多くの美術評論も行った。フランスの言論界を二分したドレフュス事件では、ドイツのスパイとされたユダヤ人将校ドレフュスの無罪を主張し、擁護の論陣の筆頭に立った。

les Halles : 都心部にあった中央市場の機能は、その後パリ南郊のランジスに移転した。

Haussmann (Georges Eugène) : ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン (1809-91)。ナポレオン三世に抜擢されてセーヌ県知事となり、パリの大規模な近代的都市改造を指揮した。

Napoléon III : ナポレオン三世 (ルイ・ナポレオン) (1808-73)。ナポレオン一世 (→第3課) の甥。第二共和政下で大統領となるが、自らクーデターを起こして帝政を復活させ (第二帝政)、皇帝として即位。独裁体制を敷く一方で社会改革に力を注ぎ、パリの近代都市化を図った。カール・マルクスが「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」(『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』) と書き、ナポレオン三世はナポレオン一世の貧弱なコピーに過ぎないと嘲笑したため、長らく無能な為政者として軽んじられていたが、その後、再評価が行われている。

l'Opéra Garnier : シャルル・ガルニエの設計により 1875 年に完成。パリを代表する歌劇場として市民や観光客に親しまれてきた。1989 年にオペラ・バスチーユが完成し、大規模なオペラはそちらを舞台とするようになったが、現在でもバレエなどの上演が行われている。

Le Fantôme de l'Opéra : 『オペラ座の怪人』(1910)。ガストン・ルルーの小説。妻を亡くした後、独身貴族として女優たちと浮名を流すフィリップ・ド・シャニー伯爵、歳の離れた弟でまだ少年の面影を残すラウル子爵、その幼馴染で恋人のオペラ座の花形歌手クリスティーヌが、オペラ座の一角に棲息するらしい謎の異形の男をめぐる巻き込まれる不可解な悲劇を描く。幻想小説やメロドラマなど、十九世紀に人気を博した文学的リソースが巧みに利用されている。

Gaston Leroux : ガストン・ルルー (1868-1927)。小説家。代表作『オペラ座の怪人』のほか、多数の推理小説、怪奇小説を発表した。

passages couverts : 鉄骨とガラスで上部を覆われたアーケード街で、十九世紀のパリに百箇所近く建設された。いまなお二十箇所ほどが現存し、懐古的な雰囲気を残す場として人気が高い。そのうちの一つ、パサージュ・ショワズールは、高踏派詩人たちの拠点であり、特にヴェルレーヌやランボーにゆかりの場であったルメール書店が存在していたことで知られる。

Walter Benjamin : ヴァルター・ベンヤミン (1892-1940)。ドイツの文芸批評家。パリを主要な活動拠点の一つとした。複製時代において芸術作品のオリジナルが持つアウラ (オーラ) が喪失することを論じた「複製技術時代の芸術作品」で特に知られる。未完の大作『パサージュ論』は多くの引用を含む膨大な量の断片からなり、パサージュを主な手がかりとして十九世紀から二十世紀のパリの都市空間に展開した新たな文化、想像力のあり方が広範に論じられている。

3. Versailles

Versailles : パリ南西約 20 キロに位置する。17 世紀後半ルイ 14 世が大規模な工事を行い、壮麗な宮殿と庭園を建設し、ヴェルサイユ宮殿はヨーロッパ諸国で王宮のモデルとなる。

le Louvre : ルーブル。当初は要塞としてセーヌ川沿いに建設され、後に王宮となる。フランス革命以降、美術館となり、モナリザをはじめ世界有数のコレクションで知られる。

Louis XIV : ルイ 14 世 (1638-1715)。幼くして即位し (在位 1643-1715)、フロンドの乱 (1648-1653) などを経験する。1661 年、宰相マザランの死後、親政を開始し、「朕は国家なり」の言葉でも知られるように、絶対王政を確立する。晩年は対外戦争を重ね、国力を浪費する。

Louis XV : ルイ 15 世 (1710-1774)。ルイ 14 世の曾孫。5 歳で即位 (在位 1715-1774) するが、オルレアン公 (1674-1723) をはじめとする摂政、果ては愛人のポンパドゥール夫人 (1721-1764) に政治の実権を委ねる。7 年戦争 (1756-1763) に敗れ、北米のカナダ、ルイジアナなどの植民地を失う。

Louis XVI : ルイ 16 世 (1754-1793)。ルイ 15 世の孫。即位後 (在位 1774-1793)、積極的に政治に関わるが、財政難を立て直すことが出来ず、フランス革命によりブルボン王朝の最期の王となる。

Les Grands Appartements du Roi et de la Reine : 王と王妃の表御座所。接客用に作られた住居部で、アポロの間、ウェニスの間、マルスの間など、ローマ神話にちなんだ天井画が描かれた部屋からなる。

la galerie de Glaces : 鏡の間。長さ 76 メートルの大広間は、庭園に面する 17 の窓から向かい合う壁の大鏡へと光が反射し、壮麗な空間となっている。各種の儀式が行われたほか、礼拝堂へ向けて国王が通るこの場所は、請願の場所ともなっていた。

le Domaine de Marie-Antoinette : マリー=アントワネットの領地。マリー=アントワネットは、王宮から離れた場所にある小さな館「小トリアノン」をルイ 16 世から与えられると、近くの庭園を改修し、植物園、劇場、「愛の神殿」、そして Le Hameau (小集落) をつくらせた。

Le Hameau : 小集落。マリー=アントワネットが自然の中での生活を楽しむためにつくらせた。小さな湖のまわりに、「王妃の家」、酪農場、鳩小屋、水車小屋が並ぶ。

la Révolution française : フランス革命。1789 年 7 月 14 日のバスティーユの襲撃を契機とする市民革命により王政を崩壊させた。

Marie-Antoinette : マリー=アントワネット (1755-1793)。オーストリアのウイーン生まれ。ルイ 16 世と結婚 (1770 年)、1774 年に王妃となり、ヴェルサイユで暮らす。贅沢な暮らしぶりや外国出身を理由にパリの民衆から反感を買う。フランス革命により、ルイ 16 世同様、現在のコンコルド広場で処刑される。

4. Reims et la Champagne

Troyes : トロワ。中世、シャンパーニュの太市が開かれた。16世紀に大火事があり、その後に建てられた木造建築が旧市街に残る。

Provins : プロヴァン。中世、トロワとならぶシャンパーニュの太市の開催地で、2001年には、「中世市場都市プロヴァン」としてユネスコ世界遺産に登録される。中世の城門、城塞や丘の上のセザール塔などが見どころ。

Clovis : クロヴィス1世 (466-511)。メロヴィング朝フランク王国の初代の国王として、フランス王国の基礎をつくる。ランスで聖レミにより洗礼を受け、カトリックに改宗した。**Charles VII :** シャルル7世 (1403-1461)。ヴァロワ王朝第5代国王 (在位 1422-1461)。百年戦争 (第1課の注を参照) 中、アルマニャック派に支持され 1422年に即位を宣言するが、ブルゴーニュ派はイングランドと結び、即位を認めなかった。オルレアンの戦いに勝利した後、シャルル7世はジャンヌ・ダルクに導かれ 1429年7月17日にランスで聖別を受ける。

Tsuguharu ou Léonard Foujita : 藤田嗣治 (1886-1968)。1920年代、乳白色の肌の女性を描いた作品などで評価され、エコール・ド・パリの中心的な画家として活躍する。ドイツ軍のパリ侵攻を前に、日本へ帰国。終戦後、戦争画や軍に協力したことを批判され、1949年、再びフランスに渡る。フランス国籍を得、カトリックの洗礼 (洗礼名レオナル) を受ける。

la chapelle Notre-Dame de la Paix : 平和の聖母礼拝堂 (別名フジタ礼拝堂)。懇意にしていたシャンパーニュ会社の近くに土地を提供され、フジタが内装を手掛けた礼拝堂。原爆投下後の光景を描いたフレスコ画など、平和への願いが込められた装飾を目にすることが出来る。

5. La Bretagne et la Normandie

Celtes : ケルト人。ドイツ起源で紀元前 2000 年に中央ヨーロッパに出現し、ガリア、グレート・ブリテン島、スペイン、北イタリア、バルカン半島および小アジアを占領した印欧語族の民族の一集団の名称。

Gaulois : ガリア人。ケルト人によって占領された二つの地域に古代ローマ人は「ガリア」という名称を与えたが、その住民のことを「ガリア人」と言う。ガリアはアルプス山脈以南のガリアと以北のガリア（狭義のガリア）に分かれるが、後者は現在のフランス共和国（本土）以外にベルギー、スイス、ライン川左岸をも含んでいる。

breton : ブルトン語。ブルターニュ地方の中でも、とりわけサン＝ブリュックやヴァンヌ以西（バス・ブルターニュ地方）で用いられるケルト系の言語。レオナル語、コルヌアイユ語、トレゴロワ語、ヴァンヌ語の四つの方言に分かれる。

gallo : ガッロ語。ブルターニュ東部（オート・ブルターニュ地方）で用いられるオイル語〔第 11 課注参照〕系統の言語。

crêpes de froment : 小麦粉のクレープ。小麦粉のクレープは、ふつうチョコレート、生クリーム、ジャム、蜂蜜、粉砂糖や果物などを使い、デザートやおやつに食べる。

galettes de sarrasin : そば粉のガレット。そば粉で作る甘くないクレープで、焼きたてにハム、卵、チーズ、野菜やきのこなどの具材を載せて食べる。

far breton : ファール・ブルトン。小麦粉、砂糖、卵を混ぜた中に種を抜いた干しぶどうや干しプラムを戻して入れ、型に入れてオーブンで焼いたケーキ。

quatre-quarts : カトル・カール（直訳で「四分の一を四つ」）。同量の小麦粉、バター、砂糖、卵を混ぜ、ヴァニラ、レモン、オレンジなどの風味をつけて焼いたケーキ。

Francs : フランク人。様々な民族からなるゲルマン系民族。紀元 250 年頃、ライン川河口に定住し、その後ムーズ川とエスコール川の間とライン川流域のケルン地方に広がった。430 年から 450 年にかけてガリアに侵入した。

invasions scandinaves : スカンジナヴィア人の侵入。いわゆる「ヴァイキング」の侵入のこと。ゲルマン系民族で、当初はスカンジナヴィアを拠点に航海をしながら商行為を行っていたが、西暦 800 年頃から 1050 年頃にかけて海賊行為を重ね、フランスに侵入してノルマン王朝を築いた。

agneaux de pré-salé : プレサレの子羊肉。満潮時に海中に没するため、塩分を含んだ草原で育った子羊の肉は、とりわけ美味とされる。

tripes à la mode de Caen : カーン風トリップ。牛の胃を香草、ニンジン、タマネギ、シードル、カルヴァドス（シードルを蒸留して作ったブランデー）などを加え長時間煮込んだ料理。

camembert : カマンベール・チーズ。柔らかい熟成させたナチュラル・チーズ。

cidre : シードル酒。リンゴを発酵させて作った発泡酒。

6. Rouen, Honfleur, Étretat et le Mont-Saint-Michel

Pierre Corneille : ピエール・コルネイユ (1604-1684)。17世紀の劇作家。古典主義演劇の原理(行為・時間・場所の単一性の規則、真実らしさと礼節)に則り、名誉、祖国愛、仁徳など高尚な主題を扱った。代表作として『ル・シッド』(1636)、『オラース』(1640)、『シンナ』(1641)、『ポリュクト』(1642)、『ロドギューヌ』(1644)、『ニコメヌ』(1651)などを残す。

Gustave Flaubert : ギュスターヴ・フロバール (1821-1880)。19世紀フランス小説家。同時代の市民社会風俗と、古代や中世の異郷の歴史という全く異なる題材を交互に扱いながら、私情を廃した客観描写に努め、精緻な文体を駆使した文学世界を構築した。小説作品に、『ボヴァリー夫人』(1857)、『サラムボー』(1862)、『感情教育』(1867)、『聖アントワヌの誘惑』(1849,1856,1874)、『ブヴァールとペキュシェ』(未完1881)など。父親がルーアン市立病院の院長であった。

Victor Hugo : ヴィクトル・ユゴー (1802-1885)。フランスを代表する詩人、劇作家、小説家にして人道主義者。王党派のロマン主義青年詩人として出発するも、後年、ナポレオン三世のクーデタに反対して第二帝政下に亡命するなど波乱に富んだ生涯を送る。詩集『オードとバラッド』(1822-1828)、『東方詩集』(1829)、『懲罰詩集』(1853)、『静観詩集』(1856)『諸世紀の伝説』(1859-1883)、劇作品『エルナニ』(1830)、『リュイ・ブラス』(1838)、小説『ノートルダム・ド・パリ』(1831)・『レ・ミゼラブル』(1862)、『93年』(1874)など多数。

Claude Monet : クロード・モネ (1840-1926)。フランスの画家。「印象派」という絵画の流派名は、1872年の彼の作品「印象、日の出」の題名に由来(当初は蔑称)。大気や自然光を研究、水面の照り返しなど移ろいやすい光の効果を画布に定着させようと努めた。古典的な形式の観念を打ち破る彼の色彩に富んだ絵画は叙情的抽象画の先駆ともされる。代表作に「ルーアン大聖堂」(1892-1904)、「テムズ川河畔」(1899-1904)、「睡蓮」(1897-1926)などの連作。

Gros-Horloge : « horloge » (大時計、時計) という単語は女性名詞なので、本来 « grosse horloge » で「大きな時計」とすべきだと考えられるかもしれない。しかしもともとこの単語は、ラテン語の « *horologium* » に由来する男性名詞であり、13世紀から女性名詞としても扱われ始め、女性名詞としての使用が優勢になったのはさらに時代が下って17世紀からである(『フランス語宝典』)。したがって « **Gros-Horloge** » という名称には、この大時計が設置された時代の言語状況が反映されているということを理解しなければならない。

Eugène Boudin : ウージェーヌ・ブーダン (1824-1898)。フランスの画家。ベルギー、オランダ、北フランスを旅行した後、オンフルールでクールベ、ジョンキントとともに「サン＝シメオン派」を結成。海景画、港や海岸の絵を得意とした。モネの師匠であり、印象派の先駆者と目される。

Gustave Courbet : ギュスターヴ・クールベ (1819-1877)。フランスの画家。初期はジェリコやドラクロワのロマン主義に心酔するが、社会主義思想の影響下で、同時代の出来事や社会の現実を描き、絵画におけるリアリズムを提唱。代表作に「石割り人夫」(1849)、「オルナンの埋葬」(1850)、「出会い(こんにちは、クールベさん)」(1854)、「画家のアトリエ」(1855)、「世界の起源」(1868)、「女とオウム」(1866)など。また、「エトルタの崖」(1870)や「ノルマンディーの海岸」(1872-75)などの風景画においても自然に肉薄した直接的な表現が認められる。

Camille Corot (Jean-Baptist Corot) : カミーユ・コロー（本名ジャン＝バティスト・コロー）（1796-1875）。フランスの画家。新古典主義の伝統から出発し、より自由で詩情に富んだ風景画へと向かい、印象派に影響を与えた。イタリアやフランス国内を盛んに旅行し、しばしばノルマンディー地方を訪れ風景画を描いた。代表作は「シャルトル大聖堂」（1830）、「朝、ニンフの踊り」（1850-1851）、「モルトフォンテーヌの思い出」（1864）、「マントの橋」（1868-70）、「真珠の女」（1869頃）、「青い服の婦人」（1874）など。

Henri Matisse : アンリ・マティス（1869-1954）。フランスの画家、彫刻家。後期印象派の影響を受け、大胆な色彩を特徴とする絵画を制作、モーリス・ド・ヴラマンクやアンドレ・ドランなどと並んで「野獣派（フォーヴィスト）」と呼ばれる。晩年は形態の単純化と色彩の純化を追及して、切り絵に向かう。代表作は「豪奢、静寂、逸楽」（1904）「ダンス I」（1909）、「模様のある背景の装飾的人体」（1927）、「夢」（1940）、「ジャズ・サーカス」（1947）、「ブルー・ヌード I」（1952）など。

7. Bordeaux, la capitale mondiale du vin

île de la Cité : シテ島。セーヌ川の中州で、パリの中心部。後述のノートル＝ダム大聖堂のほか、サント＝シャペルやコンシエルジュリーなど多くの歴史的建築物が残されている。

« **la Côte d'argent** » : 「白銀海岸」。アキテーヌ地方の大西洋沿岸の名称。ガスコーニュのランドにそって広がり、ジロンド川の河口からアドゥール川の河口（バスク海岸の北端）にまで至る。

Landes de Gascognes : ガスコーニュのランド。ボルドーの南、大西洋に面したフランス最大の森林地帯。

pruneau d'Agen : アジャンのプラム。赤や紫色の西洋すももを、日光またはオーヴンで乾燥させたもの。アジャンはガロンヌ川沿いの都市。

8. L'Aquitaine et la littérature

Étienne de la Boétie : エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ（1530-1563）。作家、政治思想家。ボルドー高等法院判事のときにモンテーニュと深い友情を結ぶ。主著に『自発的隷従論』。

9. La Touraine : le « Jardin de la France »

vallée : 「谷間」という訳語が一般的だが、なだらかに広がる沃野であり、日本で見られるような急峻な谷とは異なる。

les châteaux de la Loire : この地方の風光明媚な景観をこよなく愛した歴代のフランス国王や貴族たちが自らの好みに合わせて競い合うように優雅な居城を建てたことから、ロワール川沿いには大小の美しい古城が数多く見られる。フランス国内でも屈指の観光コースであり、ここに挙げたアンボワーズ、ブロワ、シャンボール、シュノンソーの各城館は特に名高い。アンボワーズは国王フランソワ一世がレオナルド・ダ・ヴィンチを客人として招いた地である。ブロワ城はジャンヌ・ダルクが初陣に際してランスの大司教から祝福を受けた場所、シャンボールはロワール渓谷の城の中で最大の威容を誇り、シュノンソーは歴代の城主が女性であったことから「奥方の城」とも呼ばれる。

Vouvray : トゥール近郊のヴーヴレはバルザック (→第 10 課参照) の中編『名うてのゴディサール』(1833) の主要な舞台となっている。パリの辣腕セールスマンのゴディサールが出張先のこの土地で出会った奇人の妄想を信じ、ありもしないワインを契約して一杯食わされるという物語で、ワインの名産地であればこそ成立する設定である。なお、トゥーレーヌのワインとくれば欠かせない伝統的な郷土料理のリエット (rillettes) のことを付け加えておこう。豚肉 (あるいはガチョウ) を香辛料とともに長時間煮込んでペースト状にしたもので、バゲットに塗って食べるととりわけ美味である。

la pureté du français : 実際、トゥールで話されるフランス語は非常に美しいと言われる。市内の語学教育機関も充実しており、世界中から集まるフランス語学習者を受け入れている。

TGV : Train à grande vitesse (高速列車) の略。日本の新幹線と並び、世界の代表的な超高速鉄道。TGV で長距離通勤を行なう人を指す TGViste という語もしばしば用いられる。

10. Balzac et la Touraine

Balzac (Honoré de) : オノレ・ド・バルザック (1799-1850)。作家。後述の『人間喜劇』(La Comédie humaine) は 90 以上の長短編小説からなる大作。長編では『谷間の百合』(1836) のほか、『ゴリオ爺さん』(1835)、『幻滅』(1837-43)、『娼婦盛衰記』(1847) などが有名。高度資本主義が誕生しつつあった十九世紀前半のフランス社会を写実的な手法で描き、近代小説の創始者となる。きわめて旺盛な創作活動の一方、浪費癖がひどく、常に借金の取り立てに悩まされていた。バルザックを愛読した詩人シャルル・ボードレールはこのことに関して、「天才を有する人はいかにして借金を払うか」という一文を書いている。

château de Saché : トゥール南西部に位置する城館。バルザック家と親交のあった地元の名士マルゴヌ氏の館で、現在はバルザック博物館。壮年期のバルザックはしばしばこの館に滞在してくつろぎ、また執筆活動にも打ち込んだ。

Laure [Surville] : ロール・シュルヴィル (1800-71)。バルザックの実妹。世間から毀誉褒貶が激しかった兄に対して常に良き理解者であった。また、自らも小説や兄の伝記を執筆している。

retour des personnages : 人物再登場。ある作品に登場する架空の人物を別の作品にも登場させることで自作の複数の作品を関連づけるバルザック独自の手法。『人間喜劇』の大半の作品に適用され、架空の登場人物の約 2000 人中、600 人近くが再登場人物である。

Le Lys dans la vallée : 『谷間の百合』(1836)。青年時代の恋人であった年上のベルニー夫人との思い出を投影した自伝的要素の強い作品。百合は王家の紋章であるとともに、その清純な白さとうらはらにエロスを喚起する強い芳香を伴うことから、ここでは多義的な象徴として登場人物のモルソフ夫人に重ね合わされている。

La Grenadière : 『ざくろ屋敷』(1832)。トゥール近郊を舞台としたバルザックの短編。2006 年に深田晃司監督が映画化。深澤研画伯のテンペラ画と声優陣による台詞を結合させた斬新な「画ニメ」の手法によるもので、本国フランスでも上映され、話題となった。

Contes drolatiques : 『コント・ドロラティック (風流滑稽譚)』(1832-37)。敬愛する同郷のルネサンス期の作家フランソワ・ラブレーを模した擬古文による物語集。

11. Le Midi-Pyrénées et le Languedoc-Roussillon

foie gras : フォワ・グラ。トウモロコシなどで強制肥育したガチョウ、カモの肥大肝臓。美食家に珍重される。ただし今日では、強制的に大量の飼料を家禽に呑み込ませる生産方法に批判も寄せられている。

armagnac : アルマニャック。アルマニャック産ブランデー。

roquefort : ロックフォール・チーズ。圧縮した熟成チーズで青かびが入っているのが特徴。

Dante (Durante Alighieri) : ダンテ (本名ドゥランテ・アリギエーリ) (1265-1321)。イタリア文学最大の詩人にして、哲学者、政治家。詩文集『新生』(1292-1294)、言語を論じた『俗語論』(1303-1305)、叙事詩『神曲』(1307頃-1321頃)などを執筆。

langue d'oil : オイル語。今日のフランス語が派生した地方言語で、この言語では「はい」(oui)の代わりに「オイル」(oil)と言った。

12. Lourdes, Toulouse, Albi et Carcassonne

la salle des Illustres : 著名人の間。現在「著名人の間」と呼ばれるギャラリーは、かつての「著名人の間」(1674-1887)に加え、二つの「祝宴の間」、「王権の間」、「中央ホール」から成る。「著名人」という名称は、かつてここを飾っていたトゥールーズの地元の名士たちの胸像に由来する。

les capitouls : キャピトゥール。中世以来、市議会を構成するためにトゥールーズの各地区から選出された住人を指す。25歳以上の既婚男子でカトリック教徒であり、持ち家があり、立派な職業(弁護士、検事、領主の厩舎付の役人、商人など)についていることが選考条件。フランス革命でこの制度は廃止された。

dualiste : 二元論の。「二元論」とは、還元できない二つの第一原理(善と悪、精神と肉体、など)を宇宙・世界に認める学説・思想のこと。

Eugène Emmanuel Viollet-Le-Duc : ウージェーヌ＝エマニュエル・ヴィオレ・ル・デュック (1814-1879)。フランスの建築家、理論家。中世の建築物に心酔。イタリア滞在(1836)、フランス各地の旅を経て、ヴェズレー大聖堂修復を皮切りに幾つもの中世歴史建造物の修復事業の任に当たる。彼が手がけたものでは、サン・ジェルマン・デ・プレ教会、サン・セヴラン教会、パリのノートルダム大聖堂、カルカソンヌの城砦などがよく知られている。

13. La Provence et la Côte d'Azur

Claude Berri : クロード・ベリ (1934-2009)。フランスの映画監督、俳優。監督としての代表作に、『愛と宿命の泉』二部作 (「フロレット家のジャン」「泉のマノン」) (ともに 1986)、『幸せになるための恋のレシピ』(2007)。

Marcel Pagnol : マルセル・パニョル(1895-1974)。フランスの作家、映画監督。戯曲『ジャズ』(1926)、『トパーズ』(1928)、『マリウス』(1929)。のち自作を中心に映画化する。なお、パニョルの『少年時代の思い出』を原作として、イヴ・ロベール監督によって映画『プロヴァンス物語 マルセルの夏』『プロヴァンス物語 マルセルのお城』が制作された (1990)。

14. La Provence et les artistes

fauvisme : フォーヴィスム (野獣主義)。20 世紀初頭フランスに起こった絵画運動。印象派の画風に反発し、ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌの作品に刺激された若い画家たちが共同して推進。原色主体の色彩と大胆な筆触から力強い画面を生み出した。

Paul Gauguin : ポール・ゴーギャン (1848-1903)。フランスの画家。大胆な装飾的構図と色彩を特色とする。晩年はタヒチ島に渡り、現地の人々を描いた。代表作に『われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか』(1897-1898、ボストン美術館蔵) など。

15. L'Alsace, la Lorraine et la Bourgogne

« **La dernière leçon** » : 「最後の授業」。アルフォンス・ドーデ Alphonse Daudet (1840-1897) の短編集『月曜物語』(1873) に収録。フランスが大敗北を喫して終わった普仏戦争 (1870-1871) 後、それまでフランスの一地方であったアルザス地方がドイツに併合されるという歴史的な出来事を背景に、その地方の小学校で最後のフランス語の授業が行われる様子を描く。ただし、ドイツへの併合以前、アルザス地方の学校で教わる「国語」(母国語) はフランス語ではあったが、日常的に話される「地方語」(母語) は実際はアルザス語 (ドイツ語方言の一つ) であったという指摘もある (蓮實重彦「文字と革命」、『反 = 日本語論』1977 年、筑摩書房)。

la crème de cassis : カシス酒。クロフサスグリの実から作る、濃紫色のリキュール酒。白ワインと混ぜ、キール酒 (kir) にするのが代表的な飲み方。

coq au vin : ココ・ヴァン。鶏肉に玉ねぎ、ベーコンをくわえ、赤ワインで煮込んだ料理。

bœuf bourguignon : ブッフ・ブルギニョン。牛肉に人参、小玉ねぎを加え、赤ワインで煮込んだ料理。

16. Strasbourg, Colmar, Nancy et Dijon

Goethe : ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749-1832) は、1770 ~ 1771 年フランスに留学した際にストラスブールで学び、当地の大聖堂を「ゲルマンの精髓」と呼んだ。

alsacien : アルザス語。ドイツ語の方言の一つ。アルザス地方で今も広く話されている。

Musée d'Unterlinden : ウンターリンデン美術館。ドイツ語で「菩提樹下」という名を持つこの美術館は豊かな収蔵品を誇るが、中でもグリューネヴァルト Grinewald (1460 あるいは 1475 頃 -1528) の『キリスト磔刑図』が有名。

Stanislas : 元ポーランド王スタニスラス・レスチンスキー (1677-1766)。ポーランドの王座を追われた後、フランスに亡命する。娘婿のルイ 15 世の計らいでロレーヌとバールに領地を一代限り与えられ、フランス最後の公国の主となる。ナンシーを都市改造した他、郊外の町リュネヴィル (Lunéville) に「小ヴェルサイユ」と呼ばれる庭園と城館を造らせ、そこでヴォルテールなど当代の知識人が出入りするサロンを開くなど、ロレーヌ地方の産業・文化面で多大な貢献をなした (いわゆる「啓蒙君主」の 1 人)。現在、ナンシーのスタニスラス広場の中央部にその銅像が見られる。

Émile Gallé : エミール・ガレ (1846-1904)。19 世紀末からヨーロッパを席捲した「アール・ヌーヴォー」Art nouveau を代表する美術工芸家の一人。ベル・エポック期に興隆を觀た「日本趣味」japonisme に想を得、ガラス工芸・陶芸・家具製作の分野で、植物や昆虫をモチーフとした有機的な曲線美を持つ作品制作をナンシーにおいて推進した。

17. Lyon

la Saône et le Rhône : ソーヌ川 (480 キロ) とローヌ川 (812 キロ)。ローヌ川はフランスでも最大の川の一つであり、スイスの氷河からレマン湖を経由し、リヨンでソーヌ川と合流した後、南下しアルルを経て、地中海に流れ込む。

la colline de Fourvière : フルヴィエールの丘。ソーヌ川沿いに位置し、ガロ・ロマン時代のリヨンの中心地。古代ローマの劇場の遺跡がある。丘の頂上にフルヴィエールの大聖堂が立つ。

« **traboules** » : トラブール。民家の間に作られた通り抜け可能な通路。ただし、住民の好意によって通行が許されていることを忘れずに。

l'armée prussienne : プロイセン軍。プロイセン王国とフランスとの間で 1870 年 7 月 19 日から 1871 年 5 月 10 日まで行われた戦争 (普仏戦争) の際、フランスに侵攻する。パリは陥落し、敗戦を受け、第二帝政が崩壊する。

18. Genève

Jean Calvin : ジャン・カルヴァン (1509-1564)。フランス語圏のプロテスタントの代表的指導者。北フランスのピカルディー地方のノワイヨン生まれ。プロテスタントへの弾圧が強まったフランスを離れ、1541 年以降、ジュネーヴで宗教改革を行う。主著に『キリスト教綱要』(1536)。

Voltaire : ヴォルテール (1694-1778)。思想家、劇作家、小説家。古典的な悲劇で成功を収める一方、『カンディッド』などの哲学コントや『哲学書簡』など、当時のフランス社会を批判し、相対化する作品を残す。

Rousseau : ジャン=ジャック・ルソー (1712-1778)。思想家、小説家。人間や社会に対する根源的な問いを投げかけ、フランス革命などに大きな影響を与えた。代表作として、子供の教育を扱った **Émile** 『エミール』、人間の自由と平等を論じた **Contrat social** 『社会契約論』の他、恋愛書簡小説『新・エロイズ』、自伝『告白』などがある。

19. Les Alpes : le Dauphiné et la Savoie

François I^{er} : フランソワ 1 世 (1494-1547)。フランス国王 (1515-1547) として、先王の代からのイタリア戦役を継続し、北部イタリアに勢力を伸ばす。イタリア・ルネサンスの文物をフランスに持ち帰り、レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519) を初めイタリアの芸術家をフランスに呼び寄せるなど、フランス・ルネサンスの進展に寄与する。

Second Empire : 第 2 帝政 (1852-1870)。初代フランス皇帝ナポレオン 1 世 (1769-1821) の甥、ルイ・ナポレオン・ボナパルト (1808 - 1873) が皇帝ナポレオン 3 世となって行った治世。青年時代にイタリアに亡命していたこともあるルイ・ナポレオンは、伯父と同様にイタリアへの覇権に関心を持ち、当時オーストリアが占有していたイタリアへも派兵している。

20. Aix-les-Bains et Grenoble

Alphonse de Lamartine : アルフォンス・ド・ラマルチーヌ (1790-1869)。フランス・ロマン派を代表する詩人の一人。2 月革命 (1848) 時の雄弁家・政治家としても名高い。代表作は詩集『詩的諧調』(1830) など。

Stendhal : スタンダール (1783-1842)。本名、アンリ・ベール。フランスの小説家・政治家。代表作は『赤と黒』(1830)、『パルムの僧院』(1839) など。ミラノ、トリエステなどでフランス政府の公職に就いた際、イタリアに材を取った旅行記・滞在記も残した。

Claude Lelouch : クロード・ルルーシュ (1937-)。広義のフランス、ヌーヴェル・ヴァーグ Nouvelle Vague に属する映画監督。作家主義を保持しながら、商業的にも成功を収めた映画作品で知られる。代表作は『男と女』Un homme et une femme (1966)、『愛と哀しみのボレロ』Les Uns et les Autres (1981) など。

Aux quatre coins de France

フランスところ、どころ

—人名・事項注—

2016年6月17日 Ver.1 発行

著 者 クリス・ベルアド、濱田 明、鎌田 隆行、
柏木 隆雄、寺本 弘子、寺本 成彦、
山上 浩嗣

発行者 出口 高弘

発行所 株式会社 弘学社

〒170-0013 東京都豊島区東池袋3丁目19番10-1306号

電 話 03-3984-2805 **F A X** 03-3984-2806

mail info@kohgaku.co.jp **U R L** http://kohgaku.co.jp

振 替 00140-2-668183

© Chris BELOUAD, Akira HAMADA, Takayuki KAMADA, Takao KASHIWAGI,
Hiroko TERAMOTO, Naruhiko TERAMOTO and Hirotsugu YAMAJO 2016, Printed in Japan

非売品

許可なく複製・転載すること、または部分的にもコピーすることを禁止する。

 KOHGAKUSHA